

日本NGO 始動

スマトラ沖地震 診療・配給など

【パダン（インドネシア西スマトラ州）＝矢野英基】スマトラ沖地震の被災地で日本のNGOが活動を本格化させている。家を失った多くの

被災者が今も厳しい生活を強いられており、医療面や、食料、日用品の提供などで生活支援をしていく方針だ。壊れた住宅が目立つパダン



巡回診療所で被災者を診察するAMDAの医師＝パダン、矢野写す

市郊外のクランジ地区。国際医療NGO「AMDA」（本部・岡山市）が7日、空き地に巡回診療所を開くと、すぐに数十人の住民が来てせきや下痢などの症状を訴えた。

被災後、めまいや頭痛がするという主婦のモニカさん（30）は「地域の病院では症状が軽いからと見てもらえなかった。医師が近くまで来てくれると助かる」と話す。

AMDAは地震発生直後から2次にわたり日本人の医師

ら7人を派遣し、インドネシアのNGOと協力して被災地を巡回診療してきた。骨折や外傷に加え、ショックによる頭痛やストレス、呼吸器系の病気なども目立つという。

「難民を助ける会」（東京都）は日本人スタッフ2人をパダンに派遣し、生活物資を届ける準備を開始。ピースウインズ・ジャパン（東京都）も2日から日本人スタッフ2人が現地入りし、魚の缶詰やカップめんなどを配った。

「教会の鐘では貧弱」

サモア、津波警報改善へ

南太平洋のサモア近海で9月29日（日本時間9月30日）に起きた地震・津波で、100人を超す犠牲者が出たサモアの政府が警報システムの改善に乗り出した。首都ではサイレンが鳴るが、地方ではラジオで警報を聞いた教会が鐘を鳴らす方法を試みながら、被害を拡大とみられるためだ。

政府当局者によると、津波の到来が予想される場合には国営ラジオを通じて警告を発すると同時に、首都アピアでは消防車や救急車が一齐にサ

イレンを鳴らす。アピアでは昨年、避難訓練も実施。今回の津波では住民の多くが整然と避難した。

しかし、警報システムは首都を中心に考案され、地方ではサイレンを鳴らす仕組みはない。代わりに、ラジオで警報を聞いた教会が鐘を鳴らす仕組みをつくったが、政府当局者の話では、今回の津波で鐘を鳴らした教会はわずか。大半の教会関係者はラジオを聞いていなかったとみられる。（アピア＝サモア）塚本和人